增訂 女子文法教科書 上卷

4b
815
大8

42142
教科書文庫
4
815
42-1919
260000
73170

資料室

大正八年三月八日
文部省檢定濟

4b
815
六8

文學博士 關根正直
古谷知新 共著

增訂 女子文法教科書

東京 寶文館藏版

広島大学
教
73170
図

例言

一、本書は、高等女學校及びこれと同程度の女學校の教科用書として編述せるものなり。

一、本書は、これを二卷に分ち、その上卷にて品詞の大要を授け、下卷にて專ら品詞相互の關係及文章論の概要を教へて、以て國語文法の一般的知識を會得せしめむことを期せり。

一、本書編述の主眼は、理論を避けて實際を主とせるにあり。然して、全篇歸納的說明の方法を採り、實例を先にし、法則を後にし、練習問題を設けて、直にこれが應用を計れり。

一、本書の練習問題及實例は、最も意を用ひて、生徒の學力に適應せるものを選び、且練習問題の數、徒に多きに過ぎて、教授上の支障をきたすが如き憂なからむことを努めたり。

一、本書は、文語と口語との關係を述べ、其法則を略記し、なほ實例にも練習問題にも、文語口語の兩例をあはせあげたるところ少からず。

一、本書は、說明の繁瑣にわたるをふせぎ、總て平易簡單を主として、十分教授者の爲に運用の餘地を設けたり。

一、本書は、文部省の文法上の許容に關する規定を、各其條下に分ち記して、教授者の便宜を計れり。

一、要するに本書は、文部省の教授要目に準據して、現代文通有の法則を、最も實際的に說明せるものとす。

明治四十四年十月

著者識

本書編述後茲に數年、本書を使用せらるる教員諸君より、其實驗上の高見を寄せられたるもの少からず。なかにも、本書の所說甚だ簡に過ぎたりとなすもの最も多し。著者これに鑑み、殆ど全部にわたりてこれを增補訂正し、やゝ面目を改めたり。これ一に教員諸君の賚なり。爰に其厚意を謝す。

大正七年九月

著者再識

增訂 女子文法教科書上卷 目次

第一章　單語と文……一
練習……二
第二章　名詞……三
練習……五
第三章　代名詞……六
練習……七
第四章　數詞……八
練習(一)……一〇
練習(二)……一一

第五章　形容詞……一一
練習……一三
第六章　動詞……一四
練習(一)……一六
練習(二)……一六
第七章　助動詞……一七
練習……一〇
第八章　助詞……二一
練習……二三
第九章　副詞……二四
練習……二七
第十章　接續詞……二八

練習……二九
第十一章　感動詞……三〇
第十二章　品詞……三一
練習……三三
第十三章　動詞の活用……三四
第十四章　動詞活用の名稱……三六
第十五章　動詞活用の種類……三八
其一　四段活用變格活用の一……三八
練習……四二
其二　一段活用……四三
練習……四五
其三　二段活用……四五

練習(一)……四七
練習(二)……四八
其四　變格活用の二……四九
練習(一)……五一
練習(二)……五二

附錄

動詞活用表
口語動詞活用表

上卷目次終

增訂 女子文法教科書上卷

第一章　單語と文

花　蝶　鳥　聲　月　光　咲く　眠る　きこゆ(きこえる)　清し(清い)　の　が

右の如き一つ一つの語を、文法にて單語といふ。

文語	口語
花咲く。	花が咲く。
蝶眠る。	蝶が眠る。
月の光清し。	月の光が清い。

鳥の聲がきこえる。

鳥の聲きこゆ。

右の如く、單語を集めて、まとまりたる思想をあらはせるものを**文**といふ。

國語には、文語と口語との二種あること、上例に示せるが如し。

國語の法則をば**文法**といふ。この書は、主として文語の法則を教ふ。

練習　次の文中の單語を數へよ。

一　櫻は日本の名花なり。

二　蜂が熱心に蜜を蓄へる。

三　東京は東洋一の大都會なり。

四　妻は心だてよき女なり。

五　母が自慢の栗飯をさし上げたく候。

六　美しい胡蝶の姿を見ると、すぐに愛らしい花瓣を思ひ出す。

第二章　名詞

口は禍の門。

瓜の蔓に茄子はならぬ。

紫式部は源氏物語をつくれり。

興津、袖師、田子の浦、千本の松原など繪の如し。

夕日沈めば、松蟲、鈴蟲、機織、こほろぎなど鳴き出づ。

右の例のうちにて、

口　門　蔓　繪　夕日　はいづれも物の名なり。

禍は形なきものゝ名なり。

瓜　茄子　は植物の名なり。

紫式部　は人の名なり。

源氏物語　は書物の名なり。

興津　袖師　田子の浦　千本の松原　は場所の名なり。

松蟲　鈴蟲　機織　こほろぎ　は動物の名なり。

かくの如く、すべて事物の名として用ひらるゝ單語をば、文法上これ

を名詞といふ。

練習　次の文中の名詞を指摘せよ。

一　春日の局は徳川家光公の乳母なり。

二　日章旗は大日本帝國の國旗である。

三　客室にはピアノを備へたり。

四　金錢も、名譽も、地位も、身體が弱くては役に立たぬ

五　キューバ島にては、螢を絲につなぎて、婦人の胸飾または髪飾とす。

六　小園を歩すれば、蚯蚓の聲清く、杉籬の蛛網は露を帶びて白絹の光あり。

第三章　代名詞

われ今心に思ふことあれど、汝にはいひがたし。

彼は既に故郷に歸りたり。

これとそれとは同じからず。

藁屋どもこゝかしこに見ゆ。

この事たれ言ふとなく評判になる。

こちらには川が流れ、あちらには山が峙つてゐる。

右の例のうちにて、

われ　汝　彼　たれ　は人の名の代りに用ひたる詞なり。

これ　それ　この　は物または事をさして、その名の

代りに用ひたる詞なり。

こゝ　かしこ　は場所をさして、その名の代りに用ひたる詞なり。

こちら　あちら　は方角をさして、その名の代りに用ひたる詞なり。

かくの如く、すべて事物をさして、その名の代りに用ふる單語を代名詞といふ。

練習　次の文中の代名詞を指摘せよ。

一　いづれも立ちとまりてこの景色を賞す。

二　それはわらはも望むところなり。

三　私は疲れた。お前これを持つてくれ。

四　この早苗こそ四千餘萬のわが同胞が命のもと。

五　朝げの煙こゝかしこに立ちのぼりて、あなたには早や日影も見えそめたり。

六　福女とはたれぞ。これはこれ三代將軍の乳母春日の局その人なり。

第四章　數詞

やさしき花も三つ四つ見ゆ。

習慣は第二の天性なり。

蟻軍は四疋乃至六疋づつ並列して進む。

八月二十九日空晴れたり。午前九時頃平安神宮に參拜す。

右の例のうちにて、

三つ　四つ　は數をあらはせる詞なり。

第二　は事物の順序をあらはせる詞なり。

四疋　六疋　の「疋」は、鳥獸蟲魚等を數ふる語にて、その上に數をあらはせる詞の添ひたるものなり。

八月　二十九日　九時　の「月」「日」「時」は名詞にして、その上に數をあらはせる詞の添ひたるものなり。

かくの如く、

事物の數をあらはし、順序を數ふる單語を數詞といふ。

練習(一)　次の文中なる數詞を指摘せよ。

一　本を二つ合はせて林とし、三つ合はせて森とす。

二　三大節はいづれも一年一度の大典なり。

三　富士山は本邦第一の名山にて、海拔一萬二千四百八十七尺ありといふ。

四　空氣、光線、運動の三つは、健康にとつて第一に指を屈すべきものである。

五　二階の十疊間にて、五人の學友とむつましく復習致し居り候。

名詞、代名詞、數詞は文章組立の骨子となる單語なり。これを總稱して體言といふ。

練習(二)　次の文中の體言を指摘せよ。

一　こゝは海山二つの景色を具ふ。

二　天の橋立は日本三景の一なり。

三　あなたの外には學友兩三名のみにて候。

四　日光の山中、六里の間は一面の紅葉である。

五　野蠻未開の人種でも、なかなか智慧を廻し工夫を凝すものである。

六　蟻の貯蓄心の强きことは、彼の美質の一として、人の歎賞する所なり。

第五章　形容詞

今年は卒業生少し。

良藥は口に苦し。

嶮しき山路をのぼる。

黑き雲湧き出でたり。

右の例のうちにて、

少し　は「卒業生」の下につきて、その分量をあらはせる詞なり。

苦し　は「良藥」の下につきて、その性質をあらはせる詞なり。

嶮しき　は「山路」の上につきて、その有樣をあらはせる詞なり。

黑き　は「雲」の上につきて、その色合をあらはせる詞なり。

かくの如く、

體言の下または上につきて、事物の分量、性質、有樣、色合等を說明する單語を**形容詞**といふ。

練習　次の文中の形容詞を指摘せよ。

一　おもしろき島嶼多し。

二　常に溫き情をもて愛育せり。

三　君命おもく身は輕し。

四　野邊の草葉の露しげし。

五　親しき友ほどなつかしきものはなし。

六　いぶせき伏屋に、細き烟をたてゐたり。

七　よろしき品はおほかた價たかきものなり。

八　この夥しき餓死を見て、慈善の心深き彼は、いかにもしてこれを救はむと思ひたちぬ。

第六章　動詞

花咲く。

水流る。

父書を讀む。

母衣を縫ふ。

紅葉花に勝る。

妹は家に在り。

右の例のうちにて、

咲く　流る　は、花水の自然の作用をあらはせる詞なり。

讀む　縫ふ　は、父母の目的ある動作をあらはせる詞なり。

勝る　は紅葉の有樣をあらはし、在り　は妹の存在することをあらはせる詞なり。

かくの如く、

事物の動作有樣または存在をあらはす詞を動詞といふ。

然して動作の他に及ぶ動詞を他動詞といひ、然らざる動詞

を**自動詞**といふ。

形容詞動詞は、文章中主として事物を說明する單語なり。この兩單語を體言に對して**用言**といふ。

練習(一) 次の文中の動詞を指摘せよ。

一 風やはらかに來りて、手に持ちたる花を吹く。

二 朝起きて、手を洗ひ、口を嗽ぎ、鏡に對ひて髮を梳る。

三 游泳を知るものは、激浪にのりて身體の運動を營む。

練習(二) 次の文中の體言と用言とを指摘せよ。

一 老杉枝を交へて晝なほ暗し。

二 急坂を攀ぢ中禪寺にいたる。

三 父もかへりぬ。兄もきたりぬ。樂しき此の日。

四 雪降りつもりて、野も山もまばゆし。

第七章　助動詞

花咲かず。
花咲かじ。
花咲かざるなり。　打消

人待たる。
人に捨てらる。　受身

待てば待たる。
捨つれば捨てらる。　可能

人を待たす。
人に捨てさす。
人を待たしむ。
使役

花咲けり。
花咲きたり。
花咲きけり。
花咲きき。
花を咲かせつ。
花咲きぬ。
花咲かむ。
花咲くべし。
時

花咲くべかりしに
花咲くらむ。
花咲くらし。
花咲くまじ。
推量

花咲くなり。
君君たり。
指定

花を見たし。
希望

花の咲く如し。
比較

右の例の如く、動詞(稀には名詞にもつく)の下につきて、打消、受身、可能、使役、時、推量、指定、希望、比較等の意義を添ふる詞あり。

かくの如く、

動詞の下につきて、其意義を助くる一種の單語を助動詞といふ。

助動詞はまた、

教育ほど必要なるものはあらざるなり。

鎌倉小田原の往事など思ひいでられたり。

ゆめ〳〵怠ることなかれと誡められたりき。

の如く、一の助動詞のみにては、意義不十分なる時は、其下になほ他の助動詞を重ぬることありと知るべし。

練習　次の文中の助動詞を指摘せよ。

一　花野の中に立ちたるは、美しき少女なり。

二　一卷の書籍は、のこりなう讀み盡しつ。

三　汝は拾得者の屆出でむ時を待つべきなり。

四　明くる日けふの日にあらず、この年この日惜むべし。

五　いまだ雨降らざるに、はや窓を閉ぢたり。

第八章　助詞

汝　書　讀み　我　字　習ふ

の如く、單に體言と用言とのみにては、其意味分明ならざる場合あり。これに、

汝は書を讀み、我は字を習ふ

とやうに「は」「を」の語を加ふれば、語と語との關係明になりて、

文意明瞭になるべし。

かくの如く、

他の品詞を助けて、その關係を示す單語を助詞といふ。

櫻の花　我が心　の如きは、體言と體言との關係を示す助詞なり。

枝を折る　海に浮ぶ　我も見る　西へ行く　の如きは、體言と用言との關係を示す助詞なり。

花咲けば　花咲けども　花咲くとも　の如きは、用言にのみつきて、接續の用をなす助詞なり。

雲か山か　ありやなしや　の如きは、疑問の意を示す助詞なり。

悲しいかな　美しさよ　の如きは感動の意をあらはす動詞なり。

運動せよ。　友よ來れ　の如きは命令呼掛の意をあらはす助詞なり。　右の外に、

み山か　弱しかき　曇る　の如く、他語の頭に添ひ、

深み　重げ　寒さ　の如きは、他語の尾に添ひて、或は語意を強め、或は語調を整へ、或は語意を修飾する用をなす一種の助詞あり。　其用法普通の助詞に異るが故に、特に前者を接頭語といひ、後者を接尾語といふ。　なほ接尾語には「春めく」「女らし」の如く活用

するものあり。

練習 次の文中に適當なる助詞を補へ。

一 人○一代名○末代。

二 塵○積れ○山○なる。

三 能ある鷹○爪○かくす。

四 强健なる身體○人生○基礎なり。

第九章 副詞

路甚だ狹し。

水頗る清し。

國勢遂に衰ふ。

四時常に雪を戴く。

夜も段々と更けわたつた。

皆うとうとと眠り始めた。

樹木概ね古木なり。

櫻花恰も雲の如し。

上文中の「甚だ」「頗る」「遂に」「常に」「段々と」「うとうとと」「概ね」「恰も」は其下なる「狹し」「清し」(以上形容詞)「衰ふ」「戴く」「更け」「眠り」(以上動詞)「なり」「如し」(以上助動詞)の意を一層明かに說明せむが爲に用ひられたる詞なり。

かくの如く、

用言(または助動詞)の意義を一層明瞭にせむが爲に、其用言の上に副へて用ふる單語を副詞といふ。

深く地中に埋没せり。

節面白く鳴り響く。

右の「深く」「面白く」は形容詞の副詞となれるものなり。かくの如く形容詞の副詞となる事もありと知るべし。

外國には絶えて其比を見ず。

定めてわが歸宅を待つならむ。

右の「絶えて」「定めて」は動詞の副詞となれるものなり。かくの如く動詞に「て」の助詞添はりて副詞となる事もあるなり。

いと遙に見ゆ。

極めて熱心に學ぶ。

の如く、一の副詞の上に他の副詞の添はる事もあるなり。

練習 次の文中の副詞を指摘せよ。

一 田子の浦はいかにもよい景色である。

二 今日ははや復習を終へたり。

三 新月の影まさに海角をはなれたり。

四 中間の陸地は全く海中に陷落せり。

五 濡れていよいよ色添へる秋草の花、なかなかに見どころあり。

六 書齋は常によく整頓し、勉めて亂雜を誡むべし。

七 これらの動物は、唯子を生んで養ふばかりでなく、尙これを敎へ導いてから、初めてこれを手放すのである。

八　海面極めて靜穩にして、更に風波の憂あらず、毫も船體の動搖を感ずることなし。

第十章　接續詞

山また山のはてもなし。

洋服もしくは羽織袴を着用すべし。

君あり、國あり、はた墳墓あり。

姿はいかにも美しい、しかしその心はどうあらう。

叔母は螢の多くとれたるをほめたまひ、かつ古へ此の光に照らして文讀みし人の話などし給ふ。

用事以外に交際あり。されば用なしとて人を訪はざるは、交際の道を知る者にあらず。

昨夜の大あらし、家はさながら舟のやうに候ひき。さりながら幸に、さしたる障もなかりしが、御宅はいかにや。

上文中の「また」「もしくは」は上下の語を連ね、「はた」「しかし」「かつ」「されば」「さりながら」は、文と文とを結びつくるに用ひられたる詞なり。

かくの如く、上下の語句を結びつくるに用ふる單語を接續詞といふ。

練習　次の文中に適當なる接續詞を補へ。

一　長くして○○廣し。

二　書を讀み○○字を寫す。

三　海○○○河を好む。
四　霞か雲か○○雪か。
五　出來のよき品を速に○○多數に製造す。
六　ある鳥の音は琴の如く、○○ある鳥の音は胡弓の如し。

第十一章　感動詞

あゝ、愉快なる遠足日。
あら、なさけなの御言葉や。
あな、すさまじき瀑の音。
いざ、諸共に野にゆかむ。
あはれ、不便の者どもかな。
おや、おや、何といふありさまだらう。
おゝ、びつくりした。

上文中の「あゝ」「あら」「あな」「いざ」「あはれ」「おや おや」「おゝ」は、いづれも感動したる時に自然に發する聲なり。かくの如く、感動の意をあらはす單語を感動詞といふ。

第十二章　品詞

以上にて單語の分類を終へたり。かく分類したる語を文法上品詞と稱す。

今説明せるところによりて十品詞を概括すれば左の如し。

- 體言
  - 名詞
  - 代名詞
  - 數詞
- 用言
  - 形容詞
  - 動詞

語形の變ぜざる語
- 名詞
- 代名詞
- 數詞
- 助詞
- 副詞
- 接續詞
- 感動詞

語形の變ずる語
- 動詞
- 形容詞
- 助動詞

練習　次の文中の各單語を分類せよ。

一　文は短く、事のわかり易きを第一とす。

二　食は常に飽きて、然る後に美しからむ事を求む。

三　女は物に感ずる事深く、且こまかき處までも思ひやるものなり。

四　あゝ本邦に生れ出で、この美俗の人となり、更に聖

世に遭遇す。誠に千載の一時なり。

五　少女戸をあけて、雪よ雪よと呼ぶ。あはれ朝の景色の最もすぐれたるはいづこならむ。

六　御身等は、常に林中または田畝の間にて、彼等の擧動を觀察せしならむ。

第十三章　動詞の活用

梅の花咲かむ。

梅の花いまを盛と咲き匂ふ。

梅の花咲く。

梅の花の咲く頃になりぬ。

梅の花は咲けども、鶯はいまだ鳴かず。

梅の花よ、早く咲け。

右の例にて、「咲く」といふ動詞の種々に形を變ふるを知るべし。而して猶よくこれを吟味すれば、

さか
さき
さく
さけ

と一語の中に、變化せざる部分と、變化する部分とあるを知らむ。其變化せざる部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といふ。然して語尾の變化を活用といふなり。

動詞はすべて五十音圖の縱の一行中に活用す。卽ち「咲く」といふ動詞は、加行音中か、き、く、けと活用するが如し。

第十四章　動詞活用の名稱

動詞の活用には六種の用法あり。この用法を**活用形**といふ。活用形には各名稱あり、卽ち次の如し。

未然形　連用形　終止形　連體形　已然形　命令形

咲か(む)　咲き(匂ふ)　咲く　咲く(頃)　咲け(ども)　咲け

第一の活用形なる「咲か」は

春來れば花咲かむ。

花咲かば見に行かむ。

の如く、時の助動詞「む」、又は接續の用をなす助詞「ば」につゞき未だ成立せざることを條件として示す形なれば、**未然形**といふなり。

第二の活用形なる「咲き」は「咲き匂ふ」といふが如く、用言にいひ續くる形なれば、**連用形**といふなり。

第三の活用形なる「咲く」は、咲くといひきりて、文の終となる形なれば、**終止形**といふなり。

第四の活用形なる「咲く」は、「咲く頃」といふが如く、體言にいひ續くる形なれば、**連體形**といふなり。

第五の活用形なる「咲け」は

花咲けども鶯未だ鳴かず。

花咲けば客を招く。

の如く、接續の用をなす助詞「ども」「ば」につゞきて、已に成立せることを條件として示す形なれば、已然形といふなり。

第六の活用形なる「咲け」は、「花よ咲け」といふが如く、命令の意を示す形なれば、命令形といふなり。

あらゆる動詞は、すべてこの六種の活用形を備ふ。

第十五章　動詞活用の種類

其一　四段活用　變格活用の一

行か　咲き　く　け　こ

右の如く、動詞の五十音圖の行の四段にわたりて活用するを、四段活用の動詞といふ。

四段活用の動詞は、未來の意を示す「む」、又は打消の意を示す「ず」といふ語につゞくに、ア列の音よりす。例へば「咲かむ」「咲かず」「行かむ」「行かず」の如し。

四段活用に屬する動詞は其數甚多し。

死　な　に　ぬ（ぬる）　ぬ（ぬれ）　ね　の

右の如く、奈行に活用する「死ぬ」といふ動詞は、「なにぬね」の四段にわたりて活用すれども、そのほかに「ぬる」「ぬれ」とも活用する點、四段活用に異り。これを奈行變格活用といふ。

奈行變格活用に屬する動詞の、普通に用ひらるゝものは「死

ぬ」の一語あるのみなり。

有　ら　り　る　れ　　ろ

右の如く、良行に活用する「有り」といふ動詞は、其活用形全く四段活用に同じ。されども四段活用の動詞は、

魚を釣り

といひては、文の終りをなさず。必ず

魚を釣る

といふが如く、ウ列の音を有するに、「有り」はこれとことなりて、

こゝに魚あり

の如く、文の終りとなるにイ列の音を有す。これその異る點なり。かくの如き活用を良行變格活用といふ。

良行變格活用に屬する動詞は、「有り」のほかになほ「居り」「異り」の二語あり。

奈行良行兩變格動詞も、「む」又は「ず」につゞくに、ア列の音より す。例へば「死なむ」「死なず」「有らむ」「有らず」の如し。

四段活用の動詞は、其活用、口語文語異らざれども、奈行良行の兩變格動詞は、口語にては全く四段活用と相同じ。

注意　居リ死ヌ四段活用ノ動詞トシテ用フルモ妨ナシ。(文法上ノ許容)

文語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
四段活用 咲	か	き	く	く	け	け
奈行變格 死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

口語

良行變格	四段活用	四段活用	四段活用
有	咲	死	有
ら	か	な	ら
り	き	に	り
り	く	ぬ	る
る	く	ぬ	る
れ	け	ね	れ
れ	け	ね	れ

練習　次の文中の動詞につきて其活用の種類及活用形の名稱を示せ。

一　死ぬるをのみ名譽と思ふべからず。

二　山路に遊ぶ者もあれば、海上に浮ぶ者もある。

三　風をも雨をも厭はず、男子に劣らずよく働く。

四　爲す者は常に成り、行く者は常に至る。

五　夜にいれば氷の如き玉兎躍る。

六　手の舞ひ足の蹈む處を知らず。

七　人の人たる甲斐があるまい。

八　世に富士の嶺を望むところは多くあるけれども、此處の眺にまさるものはない。

其二　一段活用

（着）　か　き（きる きれ）　く　け（ける けれ）　こ

（蹴）　か　き　く　け　こ

右の如く「着る」「蹴る」の二語は、その活用五十音圖の一段にのみありて、これに「る」と「れ」との添はれるのみなり。されば これを一段活用といふ。然して「着る」は五十音圖中のイ例に活用するが故に、これを上一段活用といひ、蹴るは五十音圖中の

エ列に活用するが故に、これを下一段活用といふ。

上一段活用に屬する動詞の、普通に用ひらるゝは、射る、鑄る、着る、煮る、似る、干る、居る、率ゐる、見る、惟みる、鑑みる、試みるの十二語なり。（用ふを和行に活用する動詞とすれば則ちこれに屬す。）

下一段活用の動詞は「蹴る」の一語のみなり。

「む」「ず」につゞくに、上一段活用はイ列の音よりし、下一段活用はエ列の音よりす。例へば「着む」「着ず」「蹴む」「蹴ず」の如し。

一段活用の動詞は、口語文語ともに其活用異ることなし。

		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
文語	上一段活用（着）	き	き	きる	きる	きれ	きよ
口語	下一段活用（蹴）	け	け	ける	ける	けれ	けよ

注意　命令形は未然形に「よ」の添へるものなり。

練習　次の文中の動詞につきて其活用の種類及活用形の名稱を示せ。

一　春の景色に似るものなし。

二　見るうちに電光目を射る。

三　かれは水中に陷りて頻にもがき居る。

四　栗鼠が樹に居て胡桃を食ふ。

其三　二段活用

起く　か　き　く（くる）　け　こ

受く　か　き　く（くれ　くる　くれ）　け　こ

右の例の如く「起く」「受く」ともに五十音圖の二段に活用す。さ

ればこれを**二段活用**といふ。然して「起く」は上の二段に活用するが故に、特にこれを**上二段活用**といひ、「受く」は下の二段に活用するが故に、特にこれを**下二段活用**といふ。

二段活用に屬する動詞は、其數少からず。

「む」「ず」に續くに、上二段活用はイ列の音よりし、下二段活用はエ列の音よりす。例へば「起きむ」「起きず」「受けむ」「受けず」の如し。

二段活用の動詞は、口語にては一段活用に同じ。卽ち上二段活用は上一段活用に同じく、下二段活用は下一段活用に異らざるなり。

		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
文語	上二段活用	起き	き	く	くる	くれ	きよ
口語	下二段活用	受け	け	く	くる	くれ	けよ
	上一段活用	起き	き	きる	きる	きれ	きよ
	下一段活用	受け	け	ける	ける	けれ	けよ

注意　命令形は未然形に「よ」の添へるものなり。

上二段活用の「恨む」は四段活用の動詞として用ふるも妨なし（文法上の許容）

練習(一)　次の文中の動詞につきて其種類及活用形の名稱を示せ。

一　あげ場は人の浪よせて、日に日に榮ゆる港口。

二　朝とく起きて渚に出づれば、貝は打寄せられて沙の上にあり。

三　屍は朽ちて骨となり、かたなは折れて霜むすぶ。

四　沖の片帆に殘りたる夕日も、いつしか影ををさめ

て雲を染めたり。

五　夕陽山の端に殘影をとゞむる頃、顧みがちに別れ行きぬ。

六　見給ふ如く、今は氷雪閉ぢ果てて外面に出づることもかなひがたし。

七　庭園を構へ盆石を飾りて、常に見ることを得ざる自然の景を、家居の中に眺むるものなり。

練習(二)　次の文中の口語を文語に改めよ。

一　秋高く馬肥える時。

二　木によつて魚を求める。

三　吹きあげる風の音が聞える。

四　一年の計は穀をうゑるにある。

其四　變格活用の二

(來)	か	き	く(くる)	け	こ
(爲)	さ	し	す(する)(すれ)	せ	そ

右の如く、「來」「爲」はともに三段にわたりて活用し、六つの活用形を有す。然して前なるを**加行變格活用**といひ、後なるを**佐行變格活用**といふ。

加行變格に屬する動詞は「來」一語のみなり。

佐行變格に屬する動詞は「爲」の一語のみなれども、罪す、愛す、勉强す等の如く、名詞漢語などを動詞とするには、この活用によるものにて、其用頗るひろし。

「む」「ず」に續くに、加行變格活用はオ列の音よりし、佐行變格活用はエ列の音よりす。例へば「こむ」「こず」「せむ」「せず」の如し。

佐行變格活用の濁音に變ずるものあり。卽ち感ず、論ず、歎ず、重んず、輕んずなど其一例なり。

この加行佐行の二變格活用の文の終り、文語は「く」「す」にして、口語は「くる」「する」なり。これ口語と文語との差違なり。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
文語 加行變格（來）	こ	き	く	くる	くれ	こよ
文語 佐行變格（爲）	せ	し	す	する	すれ	せよ
口語 加行變格（來）	こ	き	くる	くる	くれ	こよ
口語 佐行變格（爲）	せ	し	する	する	すれ	せよ

練習(一)　次の文中の動詞につきて其活用の種類及活用形の名稱を示せ。

一　落花は枝にかへりこず。

二　花盛りの間のみ人がくる。

三　よき折もあらば、身を棄てて恩に報ぜむと心がけ居たり。

四　農夫などの、丈夫なのは、日々十分に運動するのと、戸外で新鮮な空氣を呼吸し、かつ光線の恩澤に浴するからである。

五　恙く歸りこよ。

六　春はくれども花咲かず。

七　餓死せむよりは戰場に死ね。

八　この氣風は二千年來涵養し來れるものにして、實に我國の誇とする所なり。

練習(二)　次の文中の口語を文語に改めよ。

一　終日勉强をする。

二　せねばならない。

三　午前の訪問を全廢する。

四　死ぬ時は立派に死にたい。

増訂　女子文法教科書上卷終

	上一段活用											
植	射	(着)	(似)	(干)	(見)	(居)	下一段活用	加行變格活用	佐行變格活用	奈行變格活用	良行變格活用
ゑ	い	き	に	ひ	み	ゐ	け	こ	せ	死	有
ゑ	い	き	に	ひ	み	ゐ	け	き	し	に	ら
う	いる	きる	にる	ひる	みる	ゐる	ける	く	す	ぬ	り
うる	いる	きる	にる	ひる	みる	ゐる	ける	くる	する	ぬる	る
うれ	いれ	きれ	にれ	ひれ	みれ	ゐれ	けれ	くれ	すれ	ぬれ	れ
ゑよ	いよ	きよ	によ	ひよ	みよ	ゐよ	けよ	こよ	せよ	ね	れ

文語動詞活用表

動詞／活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
四段活用						
行	か	き	く	く	け	け
押	さ	し	す	す	せ	せ
立	た	ち	つ	つ	て	て
問	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
讀	ま	み	む	む	め	め
知	ら	り	る	る	れ	れ
上二段活用						
起	き	き	く	くる	くれ	きよ
落	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
强	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
恨	み	み	む	むる	むれ	みよ
報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
懲	り	り	る	るる	るれ	りよ
下二段活用						
(得)	え	え	う	うる	うれ	えよ
受	け	け	く	くる	くれ	けよ
寄	せ	せ	す	する	すれ	せよ
棄	て	て	つ	つる	つれ	てよ
兼	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ
添	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ
勤	め	め	む	むる	むれ	めよ
消	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
恐	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
植	ゑ	ゑ	う	うる	うれ	ゑよ
上一段活用						
射	い	い	いる	いる	いれ	いよ
(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
(似)	に	に	にる	にる	にれ	によ
(干)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ
(居)	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
下一段活用						
(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ
(來)	こ	き	く	くる	くれ	こよ
(爲)	せ	し	す	する	すれ	せよ
佐行變格活用						
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
奈行變格活用						
有	ら	り	り	る	れ	れ
良行變格活用						

左行變格活用	加行變格活用	一段活用						
(爲)	(來)	植	恐	消	勤	添	兼	
せ し	こ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	未然形
し	き	ゑ	れ	え	め	へ	ね	連用形
する	くる	ゑる	れる	える	める	へる	ねる	終止形
する	くる	ゑる	れる	える	める	へる	ねる	連體形
すれ	くれ	ゑれ	れれ	えれ	めれ	へれ	ねれ	假定形
せ しろ^{いよ}	こ い	ゑ いろよ	れ いろよ	え いろよ	め いろよ	へ いろよ	ね いろよ	命令形

口語動詞活用表

動詞／活用形	四段活用							上一段活用								下一段活用								加行變格活用	左行變格活用
	行	押	立	死	問	讀	有	起	落	似	強	見	報	懲	居	蹴	寄	棄	兼	添	勤	消	恐	植	來	爲
未然形	か	さ	た	な	は	ま	ら	き	ち	に	ひ	み	い	り	ゐ	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ	こ	せ
連用形	き	し	ち	に	ひ	み	り	き	ち	に	ひ	み	い	り	ゐ	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ	き	し
終止形	く	す	つ	ぬ	ふ	む	る	きる	ちる	にる	ひる	みる	いる	りる	ゐる	ける	せる	てる	ねる	へる	める	える	れる	ゑる	くる	する
連體形	く	す	つ	ぬ	ふ	む	る	きる	ちる	にる	ひる	みる	いる	りる	ゐる	ける	せる	てる	ねる	へる	める	える	れる	ゑる	くる	する
已然形	け	せ	て	ね	へ	め	れ	きれ	ちれ	にれ	ひれ	みれ	いれ	りれ	ゐれ	けれ	せれ	てれ	ねれ	へれ	めれ	えれ	れれ	ゑれ	くれ	すれ
命令形	け	せ	て	ね	へ	め	れ	きいろよ	ちいろよ	にいろよ	ひいろよ	みいろよ	いいろよ	りいろよ	ゐいろよ	けいろよ	せいろよ	ていろよ	ねいろよ	へいろよ	めいろよ	えいろよ	れいろよ	ゑいろよ	こい	せいろよ しろ

明治四十四年十月十五日印刷
明治四十五年一月十二日訂正再版印刷
大正七年十一月二十一日訂正三版印刷
大正八年二月二十日訂正四版印刷
大正八年二月二十五日訂正四版發行

明治四十四年十月二十日發行
明治四十五年一月十五日訂正再版發行
大正七年十一月二十四日訂正三版發行

上卷
定價 金拾九錢
大正九年度臨時 金參拾錢

不許複製
增訂女子文法教科書

著作者 關根正直
著作者 古谷知華
發行者 大槻久吉
東京市日本橋區本石町三丁目十七番地
印刷者 渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所 ㊀清印刷株式會社

發行所
關西專賣
東京市日本橋區本石町三丁目
振替口座東京二八〇番
東京寶文館
大阪市東區淡路町四丁目
振替口座大阪四三番
合資會社 大阪寶文館

版權鄉文賢